ありがとう 夏100回 これからも

甲子園ベストゲーム47 1915 — 2018

長野

1位　松商学園４－３四日市工（三重）
1991年 73回3回戦
選抜準優勝の松商学園がサヨナラ勝ちで８強進出。延長十六回、エース上田佳範への死球が決勝点となった。

2位　佐久　２－３　佐賀商
1994年 76回準決勝
快進撃を続けていた初出場の佐久が、準決勝で力尽きた。九回に追いつかれ、十回にサヨナラ負け。

3位　長野日大 ７－６　天理（奈良）
2009年 91回２回戦
初出場の長野日大が七回に２点を奪って逆転。県勢の春夏通算80勝目となり、７年ぶりに３回戦へ進出した。

4位　塚原青雲 ８－７　八頭（鳥取）
2001年 83回２回戦
部員17人で挑んだ塚原青雲が初戦を突破。七回に５点を奪われて逆転を許したが、九回に再逆転した。

5位　丸子実 ９－４　箕島（和歌山）
1973年 55回１回戦
３季連続出場の丸子実が箕島を破った。相手より少ない９安打で確実に得点を重ねた。失策０の堅守も光った。

6位　松本商 ３－１　平安中（京都）
1928年 14回決勝
５回目の出場で松本商が初優勝。エース中島治康を擁し、創部15年で信州に初めて深紅の大優勝旗を持ち帰った。

7位　長野商 １－２　興南（沖縄）
1983年 65回１回戦
長野商が惜敗。三回に先取点を奪ったが、七回に追いつかれた。エース高橋は10奪三振も、十回に力尽きた。

8位　伊那北　４－１　静岡
1956年 38回１回戦
甲子園に照明設備ができ、大会初のナイター試合に。延長十回、伊那北が３点を奪って接戦に終止符を打った。

9位　松商学園 14－０　三笠（北海道）
1969年 51回１回戦
松商学園が快勝。エース降旗英行は、大会史上16人目、県勢では２人目のノーヒットノーランを達成した。

10位　諏訪蚕糸 ２－８　広島商
1930年 16回決勝
前年に初出場で初戦敗退した諏訪蚕糸が準優勝。八回に２点差を追いついたが、九回に６点を奪われ、力尽きた。

（順位はインターネットによる投票結果）

1991年 第73回3回戦（延長16回）

四日市工	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
松商学園	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4

十六回「幸運」の死球

エース上田、打席へ 232球目の初球 顔に 押し出しサヨナラ

1991年8月18日、晴天のもと午前10時24分に始まった第73回大会3回戦第2試合は、午後2時を回ってクライマックスを迎えた。

延長十六回裏1死満塁。5万5千人の観客の視線を集めて左打席に立ったのは松商学園のエースで4番、上田佳範。ここまで207球を投じていた。マウンドで対するのは四日市工（三重）の左腕、井手元健一朗。左右の好投手の対決は、初球で唐突に終わりを迎えることになる。サヨナラ死球。井手元の232球目だった。

「ラッキーでしかないですよ、ああいうピッチャーからデッドボールをもらったのは。打てる保証はありませんから」。プロ野球の日本ハム、中日で外野手などで活躍し、今はDeNAの外野守備走塁コーチを務める上田が振り返る。「高校の時、左ピッチャーとしては一番だったといまでも思ってます。井手元はね」

この年、松商は春の選抜大会で準優勝した。上田は初戦の愛工大名電（愛知）戦で鈴木一朗（イチロー）に投げ勝ち、その後3連続完封してその原動力となった。上田に熱視線を送ったのはプロのスカウトだけではない。187㌢のスタイルの良さと甘いマスクで女性ファンのハートもつかみ、アイドル的な人気を呼んだ。

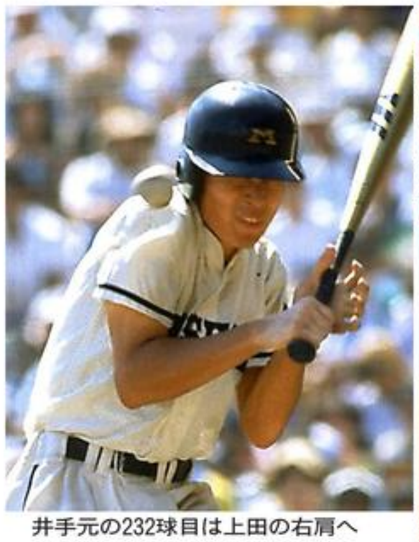
注目を浴びて迎えた、松商学園にとって27回目の夏の甲子園。優勝候補が相手となれば対戦相手の士気は高い。春夏通じて初出場の四日市工もそうだった。井手元は「どれだけ通用するか」と一回から全力で飛ばした。テイクバックの小さいフォームから繰り出される伸びのある直球に、1、2回戦で打率4割の松商打線も苦しめられた。

対する上田は「ボールが高めにしかいかなくて、どうしようもなかった」。一回から2四球を与えた。直球とスローカーブを中心に何とか持ちこたえていたが、五回につかまった。高めの直球を左翼ラッキーゾーンに運ばれ、追加点も許して3点を先制された。

七回、井手元が突如制球を乱した。松商は3連続四球に乗じ、1、2番の連打で3－3の同点に。それから両投手は、得点圏に走者を背負いながらスコアボードに「0」を並べ続けた。

正午を過ぎ、関西地方の気温は35度を超えた。延長に入り、上田の体に疲労の色が出始めた。「口を開けると歯に唇がくっついちゃって閉じないんです。イニングを重ねるごとにそうなって。アウトカウントを数えるために右手を上げるのさえもしんどかった」

十六回裏、満塁策を取った井手元に対し、上田がこの日8度目の打席に向かう。「インコース、思いっきり引っ張ってやる」。意気込んで構えたら、初球がもっと内角に、まっすぐ顔に向かって来た。思わず頭をかがめたら、右肩を直撃した。白球が三塁側に転がり、上田が倒れるのと同時に、マウンドの井手元は頭を抱えてうずくまった。試合時間3時間46分。熱戦が終わった。


井手元の232球目は上田の右肩へ

十六回裏松商学園１死満塁、投手井手元は上田に死球を与え、押し出しで試合終了

上田佳範

うえだ・よしのり
1973年、長野県松本市生まれ。松商学園から日本ハムに入団後、右ひじのけがで投手を断念し、外野手に転向。中日でもプレーした。今はDeNAの外野守備走塁コーチ。

赤く腫れた右肩 熱を取るため 貼り続けた馬肉

「松商カラー」の緑に染まった三塁側アルプススタンドは大歓声に包まれた。だがベンチでは中原英孝監督が頭を抱えていた。「右肩は良くない」。準々決勝の星稜（石川）戦は翌日の午前に迫っていた。

宿舎に戻るとすぐに関西在住のOBに連絡を取った。探したのは馬肉。「熱を取るのに一番いいんだ。長野の人はみんな知ってる」。2㌢にスライスして赤く腫れた上田の右肩へ。マネジャーや部長らが交代で、不眠で翌朝まで貼り替え続けた。結局、上田は星稜戦も完投したが、2－3で敗れた。

死球の影響はなかったのか。「大丈夫でしたよ。幸い骨じゃなかったから。翌日もしっかり腕が上がりました」。長い長いあの試合は、輝かしい思い出だ。「無我夢中でやっていれば痛みなんて感じない。それで16イニング、ほぼ2試合分できたんだから、幸せでした」

北・中・東・南　強いライバル意識

彩る球児たち～100回

地域間のライバル意識が強いと言われる「信州」こと長野県。南北に長く、長野盆地周辺を「北信」、松本・木曽地域を「中信」、上田・佐久地域を「東信」、諏訪湖から伊那谷を「南信」と呼ぶ。県高校野球連盟の支部も四つある。

大正期には野球熱の高まりが長野市と松本市の「南北対立」を再燃させ、県立校の全国大会参加を禁ずる措置が取られたことも。ほかの地域での試合前には宿舎に石が投げ込まれ、地域外の学校に進んだ選手にはスタンドからヤジが飛んだという。

戦後の28回大会（1946年）から70回大会（88年）までの夏の甲子園への地域別出場回数を見ると、中信が23回、東信が9回、南信が6回、北信が5回出場。中信が半分以上を占めていた。71回大会（89年）以降は中信14回、東信11回、北信3回、南信1回と東信が力をつけた。全国で2番目に多い36回出場の中信の松商学園による「1強」の時代は終わり、近年は毎年出場校が違う「戦国時代」に入っている。

県勢の最高成績は14回大会（28年）の松本商（現松商学園）の優勝。戦後それに最も近づいたのは76回大会（94年）の佐久（現佐久長聖）だった。

初出場ながら松崎幸二、柳沢篤史の2人の投手を中心に敦賀気比（福井）、愛知、水戸商を撃破。準決勝は延長の末、佐賀商に2－3で惜敗した。2012年にはPL学園（大阪）を指揮した藤原弘介監督が就任。70回大会以降、出場7回は松商（10回）には及ばないが、計6勝は松商と並んで県内トップだ。

松商学園で上田佳範、田中健太郎、呉本成徳らプロ入りした選手を育てた中原英孝は、05年に長野日大の監督に就任。91回大会（09年）に初めて夏の甲子園に導き、新村涼賢ら左打者を上位に並べた打線で2勝を挙げた。

印象深いのは、83回大会（01年）に2回目の出場を果たした塚原青雲（現松本国際）だ。全校生徒110人の私学で部員は17人。次年度から生徒の募集を停止する予定だった。長野大会準決勝では、金子千尋（オリックス）を擁した長野商相手に競り勝ち、甲子園でも初勝利。野球部の活躍が後押しになり、生徒の募集継続が決まった。86回大会（04年）には、部員が45人に増えて甲子園に戻ってきた。

プロ野球で活躍する松代出身の聖沢諒（楽天）、武蔵工大二（現東京都市大塩尻）出身の菊池涼介（広島）らは甲子園には縁がなかった。

89、90回大会（07、08年）の松商学園以降、連続出場はない。長野日大を去り、今はウェルネス筑北の監督を務める中原は「やはり軸になる高校がいないと、全体のレベルも上がってこない」と話す。新たな時代を作るのはどこか。地域のプライドをかけた戦いは続く。

中原英孝監督

松崎幸二

新村涼賢

金子千尋

菊池涼介

聖沢諒

ベストゲーム47 動画はバーチャル高校野球で

◆菅沼遼が担当しました。敬称略。第30回は8日、沖縄の予定です。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

甲子園 ベストゲーム 1915 — 2018

1球で流れが変わった

長野 1

1994年 第76回大会・準決勝（延長10回）

佐久	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
佐賀商	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3

九回裏、2点リードの守備。春夏の甲子園13大会の監督経験を持つ中村良隆(76)が静かに口を開く。

「あと三つのアウトを取る難しさ、野球の怖さを思い知らされました」。薄らぐことのない暗転の記憶は24年前の1994年の夏、佐久(現佐久長聖)を率いていた第76回大会の準決勝だ。

甲子園初陣の佐久は2回戦が初戦で、敦賀気比（福井）、愛知、水戸商（茨城）と3連勝した。破竹の勢いで臨んだ佐賀商との一戦も、エース松崎幸二(41)は八回まで99球で散発3安打の無失点。右腕がさえた。夏の甲子園で県勢として戦後初となる決勝進出が現実味を帯び始めていた。

ただ、土壇場で中村は、一つの不安を覚えたという。チームは九回表に1点を加え、2—0に。「得点した直後は試合が動きがち。そうならなければ良いが」。二回の先取点から待望久しい追加点に違いないのだが、1—0のスコアに特有の緊迫感が溶け出し、攻防はにわかに様変わりしていく。

捕手の宮原賢治(41)は、九回裏の先頭・西原正勝に投じた松崎の初球に、「おやっ」と感じた。100球目。低めのボールとなった直球に「魂というか、重みがなかった」。西原には右前に安打される。この主将が翌日、樟南（鹿児島）との九州決戦で、同じ九回に初優勝を呼び込む劇的な満塁本塁打を放つとは、まだ誰も知らない。

次の3番打者の一打は痛烈に右翼線へ。フェンスで不規則にはねて思いがけない三塁打となり、1点差。1死後、5番打者には三塁線突破の二塁打を浴びた。同点。ここで降板した松崎は、右翼の守備位置で延長十回のサヨナラ負けを味わう。

九回の場面について、松崎は「投げ急いだ。早く勝ちたいと気がはやった」と話す。ついつい詰めが甘くなり、佐賀商打線に捨て身の反撃を許した。

宮原にも心残りがある。「あの100球目です。ふだんなら、すぐに『どうしたんだ』と松崎に声をかけたはず。2点差に広がったことで、『まあ、いいか』とやり過ごした。1球で流れが変わったんです」

実は、九回表の1死二塁で右前に適時打を飛ばしたのが宮原だ。「いやあ、ボクが試合を動かしてしまいました」。大学、社会人野球と長く実戦を重ね、千葉県在住の現在も捕手。勝負のアヤを知り尽くしたからこそ言えるジョークなのだろう。

丸子実（現丸子修学館）と上田東の監督時代を含めて甲子園を熟知していた中村が悔やむ。「間を取ってやるべき場面だが、できなかった。勝てば初の決勝という一瞬の思いから、判断が遅れたのかもしれない」

松崎は佐久市職員として勤務のかたわら、市役所の野球チームで白球を握り続けてきた。昨年からは監督を務めている。

高校3年の夏を思い返し、甲子園での投球とは別の意味で印象深いのが松商学園を破った長野大会の決勝だという。「松商に勝たないと甲子園に行けない。みんな、そう思っていた。だから甲子園では自信を持って試合ができました」と松崎。

最近2年間など、両者の長野大会決勝カードは8度(松商の5勝3敗)。戦後では、松商—丸子実の5度を越えて最多だ。3度目の決戦でついに松商を下したのが、初の甲子園で4強に食い込む1994年だった。

夏の甲子園出場は、松商の36回、長野商の8回に次ぎ、丸子実と3位タイの7回。押しも押されもせぬ強豪校だ。勝負の過酷さを痛感した佐賀商戦は、伝統を築く貴重な礎となっていった。夏のベスト4は、戦後の県勢で唯一の記録である。＝敬称略（山田雄一）

◇

全国高校野球選手権大会が100回を迎えるにあたり、朝日新聞社は、都道府県別に甲子園ベストゲームランキングにノミネートされた10試合のうち1試合を選び、「甲子園ベストゲーム47」として朝日新聞デジタルや本紙スポーツ面で随時紹介しています。

長野県版では、「信州㊿夏100回」の第3部として、ベストゲームに選ばれた第73回大会の松商学園対四日市工(三重)＝5月4日付スポーツ面で詳報。デジタル版は「バーチャル高校野球」(http://www.asahi.com/koshien/)に掲載＝を除く、上位5試合の熱戦の記録を連載します。

佐久—佐賀商　九回裏佐賀商1死三塁、碇の同点二塁打で山口が跳び上がって生還。捕手宮原、三塁手塩野崎＝1994年8月、阪神甲子園球場

■長野県勢 夏・甲子園ベストゲーム10

【1位】○松商学園4—3四日市工（三重）　1991年　第73回3回戦

選抜準優勝の松商学園がサヨナラ勝ちで8強進出。延長十六回、エース上田佳範への死球が決勝点となった。

【2位】●佐久2—3佐賀商　1994年　第76回準決勝

快進撃の初出場・佐久（現佐久長聖）が、準決勝で力尽きた。九回に追いつかれ、十回にサヨナラ負け。

【3位】○長野日大7—6天理（奈良）　2009年　第91回2回戦

初出場の長野日大が七回に2点を奪って逆転。県勢の春夏通算80勝目となり、7年ぶりに3回戦へ進出した。

【4位】○塚原青雲8—7八頭（鳥取）　2001年　第83回2回戦

部員17人で挑んだ塚原青雲が初戦を突破。七回に5点を奪われて逆転を許したが、九回に再逆転した。

【5位】○丸子実9—4箕島（和歌山）　1973年　第55回1回戦

3季連続出場の丸子実（現丸子修学館）が選抜優勝経験校を破った。確実に加点し、失策ゼロの堅守も光った。

【6位】○松本商3—1平安中（京都）　1928年　第14回決勝

出場5回目の松本商（現松商学園）が初優勝。エース中島治康を擁し、信州に初めて大優勝旗を持ち帰った。

【7位】●長野商1—2興南（沖縄）　1983年　第65回1回戦

長野商が惜敗。三回に先取点を奪ったが、七回に追いつかれた。エース高橋は10奪三振も、十回に力尽きた。

【8位】○伊那北4—1静岡　1956年　第38回1回戦

甲子園に照明設備ができ、大会初のナイター試合に。延長十回、伊那北が3点を奪って接戦に終止符を打った。

【9位】○松商学園14—0三笠（南北海道）　1969年　第51回1回戦

松商学園が大勝。エース降旗英行は、大会史上16人目、県勢では2人目のノーヒットノーランを達成した。

【10位】●諏訪蚕糸2—8広島商　1930年　第16回決勝

初陣の前年と連続出場の諏訪蚕糸(現岡谷工)が準優勝。八回に2点差を追いついたが、九回に6点を失った。

（順位はインターネットによる投票結果）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

甲子園ベストゲーム 1915 — 2018

重ねた努力要所で結実

長野 2

2009年 第91回大会・2回戦

長野日大	0	0	0	2	0	2	2	0	1	7
天　理	1	0	1	3	0	0	0	0	1	6

「こんな試合やってたら、長野に帰れんぞ！」

五回を終えたグラウンドの整備時間。長野日大ベンチで中原英孝(73)の怒号が飛んだ。2009年の第91回大会。天理（奈良）との2回戦だった。

中原は母校・松商学園の監督として、春夏の甲子園に9度も導いた。そして、05年に就任した長野日大も08年の選抜大会で初出場させた。翌年、強力打線を引き連れて初の夏舞台を実現。1回戦で作新学院（栃木）を10―8で破っていた。

しかし、天理戦は先発投手が制球難で三回までに2失点。四回に追いつきながら、その裏、今度は3失点と後手に回る展開が続く。

重苦しい雰囲気を察した監督のカミナリだった。

試合の中断が解け、六回表。1点を返して2点差の2死一、三塁で、6番打者の本藤昇吾(26)に打席が回ってきた。

「強豪校で野球がうまくなりたい」と長野日大へ。前年の選抜は2年でベンチに入ったが、秋には外された。

「3年の春、ベンチにいなければ最後の夏はないと思え」という監督の発破に、冬場は必死でバットを振った。春、一塁手に定着した。

天理戦で好機に凡退が続いたあとの3打席目だった。緊張と重圧が高まる。そのとき、「ショウゴ、がんばれ」という声がはっきりと聞こえた。

バックネット裏に少年野球時代のコーチがいた。姿を確かめられたことで冷静になれた。フルカウントから6球目の直球をたたく。打球が中前に転がるのが見え、「ほっとしました」。三塁走者の生還で4―5。チームは息を吹き返した。

七回表、2死満塁。4番の北沢哲(26)が打席に立つ。

「入学時から、うまかった」と同学年の本藤が評する北沢もまた、苦しんでいた。長野大会のチーム打率は4割台。それなのに北沢は、主力打者として肩身の狭い1割台で終えてしまった。なぜ打てないのか。コーチに尋ねた。「腰の開きが早い」。甲子園入り後はコーチにつきっきりで見てもらい、打撃フォームの修正に励んだ。

2球目。直球狙いだったが、内角低めのスライダーに体が反応した。打球が一、二塁間を抜ける。一塁へ走る北沢の拳が思わず上がった。2点適時打で6―5。ついに逆転した。

苦しみながら重ねた2人の努力が要所で実を結び、長野日大は7―6で逃げ切った。

試合後、北沢は中原とともにお立ち台で取材を受けた。わずかな合間に中原から声がかかる。「良かったな」。そして握手。「この監督と甲子園をめざしたい」と諏訪市から長野市の長野日大に進んだ北沢には、願ってもないねぎらいだった。

北沢は現役時代、無心で打席に入るために、「全ての打席で直球だけを待っていた」という。逆転打を打ったとき、どうしてスライダーに反応できたのか。「ひと冬かけて変化球対策をした。体に染みつくように」と北沢は話す。現在は日本航空（山梨）のコーチ。恩師の教えをもとに、自らつかんだ知恵も交えて球児に授けている。

本藤は大学卒業後、長野市でJA職員。1球ごとに歓声がこだまする甲子園を「最高の舞台。人生が変わった」と話す。優勝校となる中京大中京（愛知）に3回戦で敗れ、中原が発した言葉が心に残っているという。「高校3年間の経験を糧に生きろ」だった。

「厳しい練習や上下関係の中でやったことが、社会人になってから生きています」

この年の長野日大のあと、夏の甲子園で2勝した県勢は、まだ現れていない。　＝敬称略（大野択生）

上 長野日大―天理七回表長野日大2死満塁、北沢は逆転の右前2点適時打を放ち、一塁へ
下 九回表長野日大2死満塁、本藤は中前適時打を放つ。捕手波多野
＝いずれも2009年8月17日、阪神甲子園球場

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

甲子園ベストゲーム 1915 — 2018

長野 3

17人でつかんだ初勝利

2001年 第83回大会・２回戦

塚原青雲	0	1	0	2	1	2	0	0	2									8
八　頭	1	0	0	0	1	0	5	0	0									7

2001年夏の第83回大会。前身の塚原から35年ぶり2度目の晴れ舞台に立った塚原青雲は、八頭（鳥取）戦の七回表を終えて6―2。このまま甲子園の初勝利をつかめるかとも思われた。試練は突然訪れる。

七回裏、先発のエース長谷川陽一(34)が先頭打者に四球を与えると、次打者のバント処理を野手がミスして二、三塁。適時打と野選で2点を失う。続く4番打者には死球で満塁。1死も取れずに外野へ回った長谷川を救援した投手が逆転の三塁打を浴びた。悪循環を断ち切れずに、この回5失点で6―7。みるみる劣勢に立たされた。

塚原青雲は3年生13人と1年生4人の17人が全部員。この夏、甲子園に出場した49校で最も少なかった。練習では、道具の片づけやグラウンド整備なども全員でやった。監督の羽鳥均(55)やコーチも打撃投手などで加わり、移動のマイクロバスのハンドルも監督が握った。

主将だった赤嶺勇作(34)はそんな日々を振り返り、「はたから見たら厳しい環境なのかもしれない。でも、自分たちは、当たり前と思ってやっていた」と話す。そして、前年の春、選抜甲子園に出場した金子千尋（現オリックス）らの長野商などの強豪を長野大会で抑え、甲子園への切符を手にした。

迎えたこの日の試合。長谷川は六回までを2失点にとどめた。打線も小刻みに加点し、勝ちを意識し始めていた。

ただ、涼しい県内では経験したことのない関西の蒸し暑さが、エースの体力をじわじわと奪っていた。長谷川はベンチに戻ると、ひたすら扇風機の前で涼を求めた。捕手の赤嶺の額からも汗がマスク越しに垂れた。そして七回、とうとう八頭打線につかまった。

逆転された時、赤嶺の脳裏には甲子園出場が決まってからの出来事が次々と浮かんだという。練習の合間に次々と受ける取材、県知事や松本市長への表敬訪問、家族や友人たちの顔……。そして、三塁側のアルプス席では、母校に吹奏楽部がないために松商学園と塩尻志学館の生徒たちで特別編成されたブラスバンドが陣取っていた。

「絶対に負けられない」。赤嶺は強い気持ちを取り戻した。長谷川も、チームメートたちはきっと相手投手を打ち崩す、と確信していた。

1点差をつけられたまま迎えた九回表。1死一塁で長谷川に打席が回ってきた。初球から2球連続でフルスイング。一つボールをはさんだ4球目、外角いっぱいのスライダーに体が反応し、ライナー性の打球が右中間へ一直線に飛んだ。適時三塁打で7―7。「ガッツポーズが勝手に出ました」と長谷川。試合の流れを一気に引き寄せた。

同点になったので、次打者の赤嶺は気負うことなく打席に入れた。4球目、内角高めの球を夢中で振り抜くと、詰まった当たりの打球が二塁手と右翼手の間に落ちる。8―7と再逆転。そのまま逃げ切った。

17人は本塁付近に整列し、センターポールに揚がる校旗をみつめながら校歌を歌った。初勝利の喜びがこみ上げる。「ホッとしました」と赤嶺。アルプス席の応援団へあいさつに向かう足取りは軽やかだった。

甲子園から帰ると、廃部説すらあった野球部に入部希望が続き、翌春は新たな寮もできた。04年夏、また甲子園へ。今年度は校名が創造学園から松本国際となり、部史は引き継がれた。

「17人のおかげで今がある」。同校を離れて久しい羽鳥だが、そう信じている。

＝敬称略（大野択生）

上 塚原青雲―八頭　七回のピンチにマウンドで空を見上げる塚原青雲ナイン
下 九回表塚原青雲1死一塁、長谷川は三塁打を放ち同点。塁上でガッツポーズ
＝いずれも2001年8月13日、阪神甲子園球場

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

六回の防戦隠れた勝因

甲子園ベストゲーム 1915 — 2018

長野 4

1970年代前半の2年間、信州の高校野球界では中村良隆(76)率いる丸子実（現丸子修学館）が席巻していた。72年夏の第54回大会で7年ぶり2度目の出場を遂げ、73年は春夏ともに甲子園の土を踏んでいる。中心選手は堀場秀孝(62)。1年生の夏から正捕手を務め、3年生の73年は主将でもあった。

この3季連続甲子園のハイライトは73年夏の第55回大会。作新学院（栃木）の3年生投手、江川卓でわいた大会だ。丸子実の1回戦の相手は、70年に左腕投手の島本講平を擁して春の選抜を初制覇した人気の箕島（和歌山）。9―4の快勝だった。

1973年 第55回大会・1回戦

丸子実	1	0	0	0	4	4	0	0	0	9
箕　島	0	0	0	1	0	1	0	2	0	4

丸子実のエース小林宏二(62)は、堀場と中学時代からバッテリーを組んでいた。打たせて取るタイプの長身右腕で、大崩れしないのが持ち味。強打が評判の箕島に、当時31歳の中村は「小林がどれだけ抑えられるかがカギ」と読んで臨んだ。

一回に4番・堀場の適時三塁打で1点先取し、同点の五回には4得点。だが、「5、6失点は覚悟していた」と中村は安心していない。「勝敗の分岐点」という六回の攻防が始まった。

表の攻撃で、内野安打と死四球で無死満塁。3番・佐藤武史が適時打を放つと、堀場は2本目の三塁打を左中間に深々と飛ばした。走者一掃で9―1。立役者は「会心の一打」と言う。

これで丸子実の勝機が広がったと映るが、見逃せないのは、その裏の守備だ。

小林が迎えた先頭打者は4番の島本啓次郎。3年前の選抜優勝投手の弟だ。初球を三塁打され、次打者の適時打で1失点。二盗失敗をはさみ、二塁打と2死後の安打で一、三塁。ここで内野ゴロに打ち取る。八回には2点を許したが、4長短打されても最少失点で切り抜けた六回の防戦が隠れた勝因となった。

箕島といえば、79年の春夏連覇など優勝4度の尾藤公監督（故人）が名高いが、73年は「尾藤スマイル」の主が現場を離れていた時期にあたる。

ところで、小林の打ち明け話によると、当時の中村の口ぐせは「めざせ、被安打20の完封勝利」。中村は「覚えていない」と苦笑いなのだが、「走者を出しても動じない粘りの投球は味があった」と懐かしがる。

小林は2年生の夏、1回戦で敗れた高松一（香川）との試合でも先発し、3年生の選抜では和歌山工に完投勝ち。培った登板経験は最後の夏に役立っていた。ちなみに箕島は13安打で、丸子実より4本も多い。

今治西（愛媛）との2回戦は打線が振るわず、0―5。8代前の先輩たちが残してくれた「2勝」には届かなかった。

丸子実の出場歴は第64回（82年）、67回（85年）、71、72回（89、90年）を加え、計7回。ところが、73年のあとは初戦の敗退が続く。選抜も、77年と丸子修学館に改称した翌2008年の2度とも勝てなかった。

学校の所在地は06年の上田市との合併まで丸子町。もともと野球熱の盛んな地域だが、かつては「生糸の町」として全国に知られていた。それが夏の甲子園に初登場の1965年に8強入りして以来、「高校野球の強豪校がある町」の知名度が加わった。

その伝統校も「夏の甲子園の空白期」は昨年まで27年間に上り、近年は長野大会でも苦戦が続く。昨夏は初戦の連勝記録が18年で途切れた。

長野代表は、第92回（2010年）に松本工が初出場したあと、7年連続で私学勢が占めている。小林は「後輩たちには何とか頑張ってほしい」と、仕事の合間に練習を手伝う。

公立勢の星だった「丸子の復活」を望む声は少なくない。

＝敬称略

（山田雄一）

丸子実―箕島　六回表丸子実無死満塁、堀場の左中間三塁打で三塁走者小宮山⑧、二塁走者戸谷に続き、一塁走者佐藤も三塁を回り、生還。次打者小林①、捕手宮井＝いずれも1973年8月、阪神甲子園球場

箕島を相手に完投勝ちした丸子実の小林宏二投手

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

甲子園ベストゲーム 1915 — 2018

九回裏に劇的な決着

長野 5

1928年 第14回大会・決勝

松本商	1	0	2	0	0	0	0	0	0	3
平安中	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1

ちょうど90年前の1928（昭和3）年の第14回大会。完成から5年目の阪神甲子園球場で決勝に進出したのは松本商（現松商学園）と京都・平安中（現龍谷大平安）で、どちらが勝っても初優勝だった。

今夏、第100回記念となる選手権大会の出場回数は、松商が36回で北海（南北海道）より2回少ない2位、平安は33回を数え、全国でも有数の古豪同士だ。

ところが、第14回当時で見ると、松本商は出場5回目。すでに準優勝1度、4強入り2度の強豪校だったのに対し、平安中は前年に次ぐ出場2回目の新鋭校。しかも初陣の準々決勝で顔を合わせたときは、松本商に0—6で完敗していた。

こうした背景は、3—1で松本商が制する決戦の伏線となっていたようだ。

一回表、1死満塁。松本商がスクイズで1点を奪う。打者はエースで5番の中島治康（故人）。初戦から決勝まで全5試合で完投勝利となる剛腕の小技で決戦は動き出し、序盤で3—0。松本商の優位が揺るがないまま試合は終盤に進み、九回裏の平安中の攻撃が始まった。

先頭打者が三振に倒れ、4～5番の連打で一、二塁とするが、次も三振で2死。崖っぷちの局面で7番が適時打する。待望の初得点だ。さらに重盗と四球で満塁。逆転サヨナラの走者が一塁に出たことで、球趣は最高潮に達する。打席には9番の伊藤正雄。三塁走者は兄の伊藤次郎。

この場面で、伊藤兄が松本商の意表を突く。投球を受けた捕手の百瀬和夫（故人）が中島に返球するや否や、猛然と本塁を陥れようとしたのだ。

およそ考えられないタイミングでの、いわば奇策である。それでも百瀬は落ち着いていた。マウンド上の中島に「投げろ！　早く！」と叫ぶ。本塁直前で三塁側へ体をひねった伊藤兄に百瀬がタッチ。球審の手が上がり、あっけなくも劇的な試合終了だ。中島は後に「勝利のサイレンが鳴り響いた時は、夢のようであった」と書き残した。

松本市に住む百瀬の長男・国夫(80)が父を語る。「目の隅に物体（走者）をとらえた、ということだった。自慢話はしない人が、あの場面の写真は居間に飾り、よく見ていました。特別だったのでしょう」

希代の野球記者、飛田穂洲は朝日新聞紙上で、「三塁に自重しておらねばならぬ得点差」と論評。同点、もしくは1点差ならまだしも、2点差で企てた本盗を「暴挙」としかった。

のちに大学・プロ球界で活躍する伊藤兄は、なぜ走ったのか。平安の野球部100年史でも触れておらず不明だが、「弟はこの試合も無安打で期待できない。直前に重盗も成功させた快足で大胆な勝負に出たのでは」という説がある。

予期せぬ本塁突入で投手が本塁へ悪返球すれば、二塁走者も生還して同点。そんな策略を描いていたかもしれない。前年の松本商戦でも敗戦投手の伊藤兄。「信州の勇者」の壁を破るのが並大抵でないことは実感していたと思われる。

松本商はこの年の選抜大会後、バラバラな状態に陥り、見かねた校長が一時、練習禁止令を出している。解除後に再び結束し、全国の頂点に駆け上がった。

甲子園帰りの松本商に挑戦状を送りつけて破り、自信をつけたのが諏訪蚕糸（現岡谷工）。翌29年から連続出場の第16回で準優勝する系譜は興味深い。

松商と平安は51年の第33回2回戦が夏の甲子園3戦目。1—0で雪辱した平安が2度目の優勝を遂げた。

そして今月16日、松本市野球場で開く100回記念の招待試合で、90年前の決戦カードは再現される。

＝敬称略

（山田雄一）

＝第3部おわり

松本商ー平安中　九回裏平安中２死満塁、三塁走者伊藤兄は本盗を狙ったがアウトとなり、松本商の初優勝が決定。捕手百瀬。この時代は背番号なし

全5試合の完投勝ちで松本商の初優勝に貢献した中島治康投手＝いずれも1928年8月、阪神甲子園球場

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。